足立巻一
親友記

新潮社

親友記

足立巻一

足立巻一（あだち・けんいち）

1913年，東京に生れる。児童詩誌『きりん』創刊時より編集に参加。現在は，神戸女子大学教授。〈神戸在住〉

1975年，『やちまた』（河出書房新社）により，第20回芸術選奨文部大臣賞受賞。

1982年，『虹滅記』（朝日新聞社）により，第30回日本エッセイストクラブ賞受賞。

著書：『詩のアルバム』『子ども詩人たち』『鏡——詩人九鬼次郎の青春と歌稿』『バカらしい旅行』『大と真——おじじ子育て記』（以上，理論社）『立川文庫の英雄たち』（文和書房）『夕暮れに苺を植えて』『夕刊流星号——ある新聞の生涯』『戦死ヤ アワレ——無名兵士の記録』（以上，新潮社）ほか。

親友記（しんゆうき）

一九八四年二月一五日　印刷
一九八四年二月二〇日　発行

著　者　足立巻一（あだちけんいち）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03—二六六—五一一一
（編集部）03—二六六—五四一一
振替東京四—八〇八
印刷　二光印刷株式会社
製本　大口製本株式会社
定価　一二〇〇円

© Kenichi Adachi
1984, Printed in Japan

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-339404-8　C0023

親友記＊目　次

第一章　少年の陣地　7
第二章　熱　風　31
第三章　岩本君の出現　67
第四章　煤煙荘の連中　101
第五章　青騎兵たち　129

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六章　博行堂書店　151
第七章　白い表紙の本　176
第八章　神戸詩人事件　199
第九章　驟雨　243
第十章　雑歌　261
あとがき　285

装幀　早川良雄

親友記

第一章　少年の陣地

1

親友と呼べる友を持ったのは、川崎藤吉（とうきち）が最初であった。孤児同様のわたしには、それまでひとりの友もなかった。

生後三か月で父が急死し、母もまもなく再婚して去り、わたしは祖父と祖母とで育てられたのであるが、祖父は貧しい偏屈の漢学者であり、東京の下町を転々と移り住んだので、わたしにはついに幼な馴染というものができなかった。さらに七歳の夏の大水の日に祖母が喘息の発作で頓死すると、祖父につれられて放浪暮らしをつづけ、あげくは父祖の郷里の長崎にまで流れ、祖父は銭湯のなかで死んだ。そのあと、わたしは遠縁にあたる家々で養われ、そのため小学校も一年遅れる始末だったので、友だちを持てる機会がまったくなかった。

そうしてこんどは神戸の母の兄、つまり伯父の家で養われることになった。再婚した母が、わたしが長崎でつらい日々を送っているのを知って、兄に引き取ることをせがんだからであった。わたしは神戸で、やっと放浪を終えた。大正十一年夏、九歳のときであった。

その最初に、藤吉に出会った。

伯父の家は生田神社の東門を出た道に面して、〈とらや〉という薬局を営み、大きな張り子の虎を看板に掲げ、かなり繁昌していた。西洋人や中国人の客も多かった。

藤吉の家は、その薬局と背中あわせになっている路地の裏長屋の一軒であった。そこに藤吉は幼い弟と妹との世話をしながら住んでいた。母は早く亡くなり、父は船乗りということであった。

「ぼく、藤吉さん」

はじめて会ったとき、藤吉はそう名乗った。二重瞼の目が大きく、唇が真赤で、大柄な縞のきものの袖を鼻水で光らせていた。

数日して藤吉がトア・ホテルへ写生にいこうと誘いに来た。わたしも学科のなかでは図画が一番好きだった。五歳のころから祖父に絵具を買ってもらい、友だちがいなかったので絵ばかりを描いていた。祖父は『赤穂義士銘々伝』や歴史画や武者絵の絵本を買ってきてくれたので、それを手本にして描いた。祖父が門人に漢学を教えているときも、そのそばで絵にばかりふけった。それで藤吉に誘われると、よろこんで出かけた。

ところが、藤吉が持っている画用紙を見て驚いた。わたしのそれの二倍以上もある大きなものだった。

家から生田筋のゆるやかな坂をのぼっていくと、三角帳場（さんかくちょうば）に出る。道が二股にわかれ、むかしそこに人力車の帳場があったからだというが、もう人力車はなくて中国人の散髪屋になっていた。道はそこで東西に走る広い電車道に出る。山手線といった。三角帳場の一つ西の南北の道路がトア・ロードで、トア・ホテルはその坂の突きあたりにある。黄色い西洋館で、両端に赤いとがった屋根をつけた円筒が建っていて、真夏の午後の日光に光っている。

藤吉は道ばたにきものの尻をおろすと、すぐに大きな画用紙を膝の上にひろげ、黄色のクレヨンで輪郭をとり、赤や青や黄を塗りはじめた。しかし、わたしはそれまで水彩絵具ばかり使っていて、クレヨンは神戸に移ってはじめて買ってもらったばかりだったので、どこから手をつけていいかわからず、藤吉の手の動きばかり見ていた。すると、画用紙のなかに、色どり鮮やかな西洋館がたちまち浮かびあがった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わたしはすっかり感心した。が、藤吉はせっかくきれいに描けた西洋館いちめんにうすい黒をかけた。夕暮れのように暗い画面になった。どうしてそんなことをするのかと訊くと、藤吉は「これでええのや」といい、画面に何度も目を近づけたり離したりした。

そんな画面としぐさとを見くらべているうちに、藤吉がひどくおとなびて見え、自分など到底及ばないところにいるような気がし、あるねたましさをおぼえた。

やがて第二学期がはじまり、毎朝、藤吉と誘いあわせて諏訪山小学校へかようようになった。学校でも藤吉と同じ学級であり、机も近かった。帰りも藤吉といっしょである。

そうして神戸での暮らしになれるにつれ、わたしは急に粗暴な悪たれっ子になり、ことに藤吉に対しては時にひどく意地悪をした。

学校へは三角帳場から市電山手線の電車道を左へ歩くのだが、わたしはいつも藤吉を子分のように従えた。どうしたはずみからか、電車に釘や石ころを敷かせるおもしろさをおぼえ、学校の往き帰りにそれをやった。レールに五寸釘を乗せ、物陰にかくれてうかがうと、二本のポールをつけた緑色の電車がガタガタ走って来て、一瞬少し浮き上がるようにして過ぎる。それを見はからって飛び出すのだ。五寸釘は手裏剣のように平たくとがっている。それを地面に突き立てて遊ぶ。

「そんなことしたら叱られる」

藤吉は嫌がった。

「あかんたれ！」

わたしはどなりつけ、藤吉に強いた。そのうち、釘は石ころにかわり、だんだん大きくなった。電車の車輪は石を嚙むと青い火花を発し、脱線しそうにゆれた。わたしにはそれがおもしろくてこたえられなかったが、藤吉は目をそらしておびえた。

電車道に面して同文学校という中国人の学校がある。いつも門を閉じているが、なかからはに

ぎやかな中国語の騒ぎが聞こえる。その日の登校では藤吉のほかに三人ほどの子どもがいっしょだった。

わたしは同文学校の前をとおるとき、とっさに命令した。

「石をほうりこめ！」

そして、電車道に敷いてある石ころを拾いあげた。しかし、藤吉ひとり石を持とうとしない。

「いうこと聞け！」

わたしはどなった。藤吉はべそを掻くような顔になり、しぶしぶ小石を持った。

「一、二、三！」

わたしは号令をかけ、門のなかへ石を投げこむなり、一散に走った。ふりむくと、門がひらかれ、中国人の生徒がいっせいに追ってくる。先頭を走っている中国人はおとなのように背が高い。

わたしたちが小学校に駆けこんだとき、追手はもう近くに迫っていた。もう少しでとっつかまるところだった。一番ビリに逃げこんだのは藤吉で、真青な顔をして肩で息をし、いまにも泣きだしそうであった。

学校から帰ると、生田神社の境内と森とが子どもたちの遊び場になっていた。そこでもわたしはガキ大将で、藤吉はいじめられっ子だった。

生田神社の東門のすぐ南側に生田屋ベーカリーという洋菓子をつくる小さな店があった。菓子は卸しにするらしく、店には菓子をならべているわけではないが、「耳」というのを売っている。洋菓子の裁ち屑なのだ。それを駄菓子を買う金で紙袋いっぱい売ってくれる。裁ち屑だけれど、駄菓子よりずっとうまいので、わたしは伯母から小遣いをもらうと買いこんで、鳥居の石段に腰かけながら少しずつ頬張る。左手で紙袋をかかえ、右手で「耳」を一つずつ取り出しては口に入れ、ゆっくりしゃぶる。それをいつもじっと見ているのは藤吉だった。しかし、わたしは一度でも藤吉に分けてやろうとはしなかった。わたしの口もとをうらめしそうに見ている藤吉を見おろ

し、さらにゆっくりと「耳」を食った。わたしに別段魂胆があったわけではない。藤吉を無視していたのだ。が、それが藤吉にとっては終生の屈辱ともなり怨恨ともなった。

2

翌大正十二年、わたしも藤吉も三年生となり、その九月一日には関東大震災があった。避難民が続々と流れこみ、生田神社の前では演歌師が甘粕大尉の唄をバイオリンに合わせて歌った。

そのころ、藤吉の身の上は大きく変わった。船員の父が船をおり、若い後妻を入れたのである。後妻の弟という人も同居し、狭い長屋は一度に賑やかになった。そして、その翌年には男の子が生まれ、藤吉は学校から帰ると子守りばかりさせられた。

そのころ、子どもたちのあいだではチャンバラごっこがはやっていた。当時の子どもたちは家できものを着ることが多くて、みんな黒い三尺帯を持っていたので、学校から帰るとそれを持ち出し、生田神社の森に勢揃いした。それから、黒い帯を顔に巻きつけて覆面し、竹を折って刀に見立て、あるいは棒切れを十手にして走り回るのだった。ガキ大将のわたしは年下の子どもたちに「御用！　御用！」と喚かせ取り囲ませ、それを斬りまくって走り、木によじ登る。

夜になると、チャンバラの舞台は森から境内に移る。わたしはそこでも主役である。ある夜、竹の剣を振り回していると、藤吉が赤ん坊をおんぶしたまま「寄せてえな」と小声で言った。

「よし、御用になれ……」

そう命令すると、藤吉は木切れを右手に持ち、左手では赤ん坊の尻をおさえ、黄色い声で「御用！　御用！」と言った。わたしは一刀のもとに斬って喚いた。

「死ね！」

藤吉はよろけて膝を折った。

そのうち、森や境内でのチャンバラではおもしろくなくなった。それには格好の場所を見つけたのである。

学校からの帰り、いつものように藤吉とふたりで市電通りを三角帳場のほうへ歩いていた。二学期も終わりに近づいて、風は冷えはじめている。藤吉はきものに前だれをつけ、そのうえに樺色に黒い横縞のはいった大きなマントをかけ、その裾をひるがえし、まるで股旅映画の侠客のように歩いている。赤ん坊をおぶっていないときの藤吉は、見違えるほどいきいきしていた。

藤吉は横町の角まで来ると、急に立ちどまって山手のほうを眺めていたが、いった。

「あれ、幽霊屋敷や……」

そこには、こわすのか修理をするのか、壁土・建具を全部はがした二階家があった。古びた柱ばかりが骨のように立ち、交錯し、階段らしいものが残っていて、いかにも幽霊屋敷のように見える。が、わたしはとっさに藤吉とはまったく別のことを考えた。ここでチャンバラやったらおもしろいだろう、と思ったのだ。

その夜、わたしは近所の子どもを呼び集め、その幽霊屋敷へ出かけた。藤吉もやはり赤ん坊をねんねこで背負ってついて来た。

その家は夜陰のなかに静まりかえり、月光を受けて一層幽霊屋敷のように見える。みんなを制止してひとり壁土だらけの段梯子をのぼると、窓も壁もないので、庭が真下に見え、隅には何に使うのか、藁の束が山積みにされている。

わたしは二階から藁の束を庭のまんなかに敷くように命令し、みんなにどなった。

「覆面して二階へ来い！」

わたしは覆面し、竹の刀をひるがえし、「何者！」と叫んで身を躍らせた。一瞬ふわりとした浮動感があり、そのまま藁のなかに腰を沈めていた。よく乾いた藁のにおいが鼻をさした。

立ちあがると、二階の連中に号令した。

「冒険や！　みんな飛べ！」

少年たちは、「何者！」と口走りながら、つぎつぎに飛びおりた。「何者！」というのは鳥人高木新平と月形竜之介とが主演した冒険時代映画で、黒装束の新平は高い木から飛びおりた。子どもたちはそのまねをしているつもりだった。

ところが、最後のひとりになってどうしても飛ぼうとしないやつがいる。赤ん坊をおんぶしているので、藤吉だということはすぐにわかった。

わたしは二階へ駆けあがると、藤吉の背から赤ん坊をもぎとった。

「飛べ！」

が、藤吉は大きな二重まぶたの目をしょぼつかせ、わたしの目を悲しげにのぞきこんでいるばかりだ。

「飛べ！」

わたしは竹の刀を鳴らした。藤吉は涙をふき出しそうな、哀願するような眼ざしでわたしをにらんでいたが、やにわに背をひるがえした。

黙って、両のこぶしを握りしめ、背を力いっぱいまるめたまま、小さな黒い物体が一瞬落下していくのをわたしは見た。

3

わたしは藤吉をよくいじめたけれど、底意があるわけでもなく、むしろ藤吉が好きであった。好きであったからこそ、いじめたりからかったりしたのであろう。だから、学校への往復はいつもいっしょだったし、藤吉が赤ん坊の守りをしなくてもいいときには、ふたりで絵を描いた。もっとも、そのころには阪東妻三郎や市川百々之助の似顔を盛んに描いた。

そこに一鶴があらわれたのは、チャンバラの熱もさめたころなので、五年生になって組替えがあってからであろう。一鶴というのはのちの俳号で、吉田鶴夫というのが本名だ。

一鶴は背は普通だったけれど、肩幅が広く、やや胴長のがっちりした体格である。顔色は浅黒く鼻翼が張って眉と目とはやや釣りあがり、精悍に見える。事実、腕力も強く、運動神経もよく発達し、すもうでは腰にねばりがあってめったに倒されないし、走るのも速いし、もちろんケンカも強い。あるとき、子どものくせに「ケンカは気が弱かったらアカン」といったりした。

学級対抗の野球のゲームがあったとき、一鶴は選ばれて八番を打ち、センターを守らされた。その小学校には、大きな洋館の建ちならぶ山手通りの裕福な家の子が多く、かれらは気品のある白い顔をし、サージの洋服を着、級長も副級長もかれらから出、野球の選手もかれらが占めていた。ミットやグラブを持っているのも、かれらであったからである。

そのチームのなかで、一鶴ただひとり、わたし同様の小倉もめんのズボンをはき、ハダシであった。そして、みんな三振するのに八番の一鶴だけがホームランを打ち、すこし尻を突き出し、風のように走ってホームインしたし、最終回近い守備では大飛球を腰を落として捕って拍手を浴びた。

登校のときは藤吉とふたりづれだったが、帰りには一鶴を加えて三人になるようになり、道筋も市電通りをトア・ロードまで歩いて、そこから坂をくだるように変わった。一鶴の家がトア・ロードの中ほどの角の小さな自転車屋だったからである。一鶴の店を東へ折れると、すぐに生田神社の表門の前に出るので、一鶴と別れると、藤吉とふたり神社を抜けて帰ればよかった。

もっとも、一鶴はそのまま家に引っこむことはめずらしく、カバンを放りこむとわたしたちを道草に誘う。

ある日の下校の道で、一鶴はいった。

「汽車の煙突の火、赤うてきれいやぞ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com